

2024（令和6）年度 第1回 知床世界自然遺産地域

適正利用・エコツーリズム検討会議

議事概要

日時：2024（令和6）年6月21日（金）13:30～16:30

場所：斜里町公民館「ゆめホール知床」公民館ホール

<議事>

1. 設置要綱への新委員の追加等について
2. 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況
3. 個別部会等からの報告
 - (1) 厳冬期の知床五湖エコツアー事業
 - (2) 知床五湖地区における取組み
 - (3) カムイワッカ地区における取組み
4. 関係機関からの報告
 - (1) ホロベツ園地の再整備事業について
 - (2) 知床アクティビティリスク管理体制検討協議会の検討状況
 - (3) 第8期羅臼町総合計画における観光推進に係る施策について
 - (4) 国立公園指定60周年・世界遺産登録20周年記念事業について
5. 知床エコツーリズム戦略の見直しについて
 - (1) エコツーリズム戦略見直しの方向性
(インタープリテーション全体計画の視点とゾーニング)
 - (2) エコツーリズム戦略見直しの手順・スケジュール
6. その他
 - (1) 知床岬地区における携帯電話基地局整備について

<出席者>

適正利用・エコツーリズム 委員

北海道大学大学院 農学研究院 教授	愛甲 哲也	欠席
弘前大学 名誉教授	石川 幸男	web
北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 准教授	石黒 侑介	
北陸先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 教授 (座長)	敷田 麻実	
金沢星稜大学経済学部地域システム学科 講師	船木 大資	
株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役	松田 光輝	
北海道立総合研究機構 エネルギー・環境・地質研究所 専門研究員	間野 勉	

以上、五十音順

科学委員会委員長

北海道大学 名誉教授	中村 太士	欠席
------------	-------	----

地域関係団体

ウトロ地域協議会 会長	米澤 達三	
ウトロ地域協議会 事務局	桜井 あけみ	
特定非営利活動法人 知床斜里町観光協会 事務局長	新村 武志	
(一社)知床羅臼町観光協会 事務局長	和久井 一躬	web
知床ガイド協議会 会長	岡崎 義昭	
公益財団法人知床財団 理事長	村田 良介	
同 事務局 長	玉置 創司	
同 事業部 部長	山本 幸	
同 事業部 参事	秋葉 圭太	
知床自然保護協会 理事	遠山 和雄	
同 会長	綾野 雄次	web
斜里山岳会 副会長	山中 正実	
羅臼遊漁釣り部会 事務局	天野 美樹	
知床小型観光船協議会 会長	神尾 昇勝	web
一般財団法人自然公園財団 知床支部 主任	向山 純平	

以上、設置要綱記載順

関係行政機関

斜里町 産業部 商工観光課 課長	南出 康弘	
同 産業部 商工観光課 観光係長	岩渕 聖也	
同 総務部 環境課 課長	結城 みどり	
同 総務部 環境課 自然環境係 係長	吉田 貴裕	
羅臼町 産業創生課 商工観光係長	川口 勇也	web

事務局

環境省 釧路自然環境事務所 所長	岡野 隆弘	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 課長	柳川 智巳	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 世界自然遺産専門官	吉田 宗史	
同 釧路自然環境事務所 国立公園課 係員	白井 義人	
同 釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 首席国立公園保護管理企画官	二神 紀彦	
同 釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 国立公園利用企画官	伊藤 薫	
同 釧路自然環境事務所 ウトロ自然保護官事務所 国立公園管理官	加倉井 理佐	
同 釧路自然環境事務所 羅臼自然保護官事務所 自然保護官	西村 健汰	
林野庁 北海道森林管理局 計画保全部 計画課 課長	寺村 智	web
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 所長	川崎 文圭	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 生態系管理指導官	作田 明	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 専門官	寺田 崇晃	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 森林技術指導官	清水 亜広	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 署長	鷹野 孝司	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 森林技術指導官	杉原 優人	
北海道 環境生活部 自然環境局 自然環境課 主査	真野 英世	
同 経済部 観光局 観光振興課 主査(AT調整)	中本 知世	web
同 経済部 観光局 観光振興課 主任	坂口 大晃	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 課長	矢嶋 祐一	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	小川 耕平	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係 主事	綾部 武洋	
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 知床分室主幹	三井 義也	
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	河崎 淳	web
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係 主事	小林 洸也	web
国土交通省 北海道運輸局 釧路運輸支局 首席運輸企画専門官	新堂 聡志	web

運営事務局

公益財団法人 知床財団 事業部 羅臼地区事業係	坂部 皆子	
同 事業部 羅臼地区事業係	谷 洸哉	
同 事業部 羅臼地区事業係	渡部 憲和	

※1 議事概要の記述において、発言者の敬称・肩書などは省略しての記載とした。行政関係者の所属については、一部略称を使用した。

※2 文中、検討会議は適正利用・エコツーリズム検討会議の、WGはワーキンググループの、APは河川工作物アドバイザー会議の、MLはメーリングリストの、それぞれ略称として使用した。

<議事概要>

西村：これより令和6年度第1回適正利用・エコツーリズム検討会議を開催する。開催に先立ち、環境省釧路自然保護官事務所の岡野から挨拶申し上げる。

岡野：いよいよグリーンシーズンを迎えてご多忙の中、委員並びに関係機関の皆様のご参集及びオンラインでのご参加に感謝申し上げます。本日の検討会議の議題は多岐にわたり、個別部会からの報告や関係機関からの報告をお受けし、議論を進めていきたい。また遺産管理計画の改定を踏まえて、エコツーリズム戦略の見直しの方向性や手順、スケジュールについて事務局から提案するため、議論を願いたい。最後の議題となるが、その他の項目で知床岬地区における携帯電話基地局の整備について、先日の科学委員会の結果を報告させていただく。本日は限られた時間ではあるが、忌憚のない意見をお願いします。

西村：次に委員の出席について報告する。本日は敷田座長、間野委員と今年度より新しく加わった石黒委員、船木委員、松田委員の5名が現地で参加し、石川委員はWEB参加、愛甲委員は欠席である。

続いて、本日の資料について検討会議の議事次第の裏面に一覧表があるため、資料の不足等があったら、運営事務局に申し出願う。なお本検討会議の資料及び議事概要は後日、知床データセンターで公開される。それでは以降の進行を敷田座長へお願いする。

敷田：ご多忙の中、参集いただき感謝する。本日はあいにくの雨模様だが、本検討会議には大勢の方が集まり、議論をする場である。外の天気とは関係なく充実した話し合いが花開くようにと思っている。先ほど岡野所長から話があったように個別部会や関係機関からの報告と、今回の大きなテーマであるエコツーリズム戦略の見直しについて環境省より提案がある。最後には知床岬地区における携帯基地局の話をしたい。

昨年度をもって、中川委員と高橋委員は退任となり、本WGの専門家に新しく3名の委員を迎えたため、順に紹介する。1人目は北海道大学の石黒委員、2人目は金沢星稜大学の船木委員、3人目は知床ネイチャーオフィス代表の松田委員である。新しい専門分野も広がり、皆さんと議論をするための専門知識が豊富になったと考えていただきたい。委員は、それぞれの専門分野から発言し、専門分野以外の意見を述べる際はそれと区別し発言するように留意願う。なお、私は座長のため進行上、自分の専門分野でないことを言及することもあるが、容赦願う。この検討会議はそれぞれの立場や所属が異なる方が参集している多様な参加者が参加する会議であり、考え方の違いがある。また考え方の違いを否定するのではなく新しいアイデアや提案に繋がれば

良いため、自由に発言してほしい。そのため、所属の立場での発言の責任を取っていただくことはない。あくまでご自身の経験や専門分野に基づいて発言してもらって構わない。組織としての発言の場合は、その旨を発言ください。

それでは議事に入るが、資料 1-1 と資料 1-2 の資料説明を環境省より願う。

1. 設置要綱への新委員の追加等について

資料 1-1 適正利用・エコツーリズムワーキンググループ設置要綱

資料 1-2 適正利用・エコツーリズム検討会議設置要綱

…環境省・西村が説明

敷田：説明に感謝する。前回の検討会議で指摘のあった WG の委員の専門分野を今回より表示している。それ以外の分野についても知見を持っていると思われるが、表示している分野は委員の申告によって示した最も代表的な分野であると考えていただきたい。意見がないため、本議題の説明を終了する。

2. 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況

資料 2 知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況

…北海道・三井が説明

敷田：説明に感謝する。意見がないため、本議題の報告と確認を終了する。資料 2 では、過去からの積み上げが分かりやすく表示されており、どういったことをしてきたかを振り返っていただきたい。

3. 個別部会等からの報告

(1) 厳冬期の知床五湖エコツアー事業

資料 3-1 2023 年度 厳冬期の知床五湖エコツアー事業実施報告

…知床斜里町観光協会・新村が説明

敷田：説明に感謝する。厳冬期の知床五湖エコツアー事業報告に関して、質問やコメントはあるか。斜里山岳会の山中氏、ご発言願う。

山中：厳冬期の知床五湖エコツアーは人気で順調に利用者が増加していることは良いことだが、利用に対する上限人数は定められているか。あまりにも利用者が多く数珠つなぎでツアーが催行されていると魅力が低下していくことが懸念される。

新村：上限人数は 1 日 150 名に設定している。2 月のピーク時にあたる三連休においても 1

日の利用者は 120 名前後と現在のところ静寂性は保たれていると考えている。今後、利用者が増える可能性もあるが、上限人数は守らなければならないと理解している。そして一番の見所として、夏の知床五湖とは異なる静寂性が求められ評価されていると考えているため、現在のところは上限人数を増やすことは考えていない。

敷田：新村氏、説明に感謝する。説明いただいた通り検討会議で議論した際に、第一に静寂性を保ったままの利用であることやガイドにより利用者のコントロールを行うことが条件でスタートしたツアーである。また積雪期のツアーであるため、積雪が十分なことから植生へのインパクトも低いと考えられ認められたツアーであると考えてほしい。人数上限については当初から変更していない人数である。今後も特別なことがない限りは上限を守っていただき、上限人数の変更希望があれば、検討会議で再度検討することになる。

また私から質問だが、2023 年度においてルート変更の必要性はなかったということによろしいか。

新村：2023 年度は、ルート変更の必要はなかった。

敷田：検討会議でルート変更について議論するという案もあったが、積雪期ということもあり植生へのインパクトも少ないことから現場での判断に任せて、後ほど報告してもらうことになった。今回の検討会議でもルート変更はなかったという報告であった。それでは質問等がなければ次の議題へ移る。

(2) 知床五湖地区における取組み

資料 3-2 知床五湖における取組の進捗状況について

…環境省・加倉井が説明

敷田：説明の内容に質問やコメントがあればお願いします。昨年の検討会議でも話題になったが、スイレンの除去は現在のところ重機等を持ち込めないため、集中的に人力で行うしかない。現場で対応している方にはご苦勞をかけているが、目に見えて進捗があるわけではなく、エンドレスにならないように考えなければならない。加倉井氏に尋ねるがスイレンの地下茎があるうちは生きているのか。今後どのように除去する方針なのか確認していただきたい。

加倉井：スイレンはレンコンのように根がある限りは葉が出てくる可能性があるが、根茎から除去することが地形的に困難であるため、現在は葉のみを除去している。葉を除去することにより光合成によって葉から根へ送られる栄養の供給源を断ち切ることで、

徐々に根茎の栄養を消費させる作戦で進めている。

敷田：説明に感謝する。次に斜里山岳会より質問がある。

山中：1990年代から2000年代の春から初夏にかけて、冬に衰弱もしくは死亡したエゾシカの死体や初夏に産まれた子シカに遊歩道脇でヒグマが居着いてしまい、ヒグマからそういったエゾシカを取り上げるための安全確保にかなり苦勞した。間接的に現場のスタッフから聞いた話のだが、今年度のヒグマ活動期において遊歩道脇で子シカを食べているヒグマが確認されたが、登録引率者はツアーを中止せずに催行していたという状況があったとのことだが、知床五湖のヒグマの状況は大丈夫なのか。

加倉井：今年の5月末にそういった事例が1件あった。その件についてだが、通過した全てのツアーがヒグマがエゾシカを食べていると認識していたわけではなかった。この事例については6月に行った知床五湖登録引率者研修の中でも取り上げ、ミズバショウ帯以外において連続してヒグマを目撃した場合は、エゾシカの採食を疑った方が良いという結論に至った。ヒグマが落ちて見えてだけで、非常に危ない状況であったと確認した。

山中：承知した。今年は1件のみだが、去年は多くあったと聞いている。人がヒグマに慣れてきているのではないか。慣れて良いことと、絶対に慣れてはいけなことがあり、システム管理上そのあたりがルーズになってくると事故が発生してしまうと思うため、状況をしっかりモニタリングして危険性を判断した方が良い。

敷田：懸念を示していただき感謝する。加倉井氏、今のご指摘は対応可能であるか。

加倉井：承知した。

敷田：感謝する。知床五湖1湖は知床連山が湖面に映り、観光客がそれを楽しむ非常に重要な場所であると去年の検討会議で議論され重点的に問題解決を図ることとなった。今年は周年事業と連携し事業に取り組むと去年の検討会議で岡野所長から発言があったが、周年事業でスイレン除去に対して支援があるのか。

岡野：資料3-2に、地域イベント参加募集チラシを掲載しているが、このイベントは周年事業として盛り上げましょうという形で行っている。

敷田：多くの費用を使ってもらっていると認識して考えてよろしいか。

岡野：費用に関して多くはないが、皆様のお力沿いをお借りしながら、事業に取り組んでいきたい。

敷田：イベントも良いが、スイレン除去などに費用を使用してもらえれば、皆にメリットが生ずると考えられるため、お願いした。スイレンは前々回の検討会議でも話題になったが、非常に労力のかかる作業であるため、関心を持って関わって欲しい。

船木：現在、スイレンの除去作業を懸命に行っているとのことだが、確認として伺いたい。開拓時代に開拓者が移植したスイレンが存在することは、一部の書籍や文献によっては肯定的に捉えられてもいる。地域の中でそういった文脈の議論は出てきているか。募集チラシでは「外来種としてのスイレンを駆除しよう」ということが前面に出ているが、スイレンがあることの肯定的な意味にも配慮をする必要があるのではないかと思われる。

敷田：質問に感謝する。開拓の歴史にも関わりがあるため、一方的に悪者扱いして駆除することは問題ではないかということだが、環境省はいかがか。

加倉井：昨年度より試験的にスイレンの除去を始めるにあたり、スイレン除去に関する地域向け説明会をウトロで実施した。現在のところは除去に対する反対意見はなく、全員でスイレンを除去していこうという形になった。

敷田：説明に感謝する。説明会の時は異論がなかったということで船木委員はよろしいか。

船木：問題ない。

敷田：石川委員は、前回検討会議で植生について発言されていたが、何か補足はあるか。

石川：以前にも指摘させていただいたが、本州でもスイレンが問題になっているため、除去方法については本州の事例を参照しているか伺いたい。また実際にどういった効果が得られるかについては、資料3-2の写真2の景観写真でも分かるが、先ほど資料説明では定点を設けてモニタリングを行っているところのご説明があったことから、どのように定点を設けているか教えて欲しい。

敷田：1点目のスイレンの除去方法については神戸大学の角野先生に相談をし、事業をスタートしていると認識している。2点目について、前回の検討会議資料では写真を用い

て経年的比較をしているとのことだが、加倉井氏より補足を願います。

加倉井：定点のモニタリングについては、1湖の上空写真に加え、1湖の中にコドラートを4～5か所設置し詳細に葉の出るスピードや成長具合をモニタリングしていきたいと考えている。

石川：コドラートの設置場所は、陸地では杭が打てるが、湖面ではどのように設置しているか。

加倉井：コドラートは漁師が使用しているブイを借用して設置している。設置した箇所の位置情報を取得し、後日確認したが、ほとんど動きはなかった。そのため、派手な色でない黒色の小さめのブイを湖面上に設置し、コドラートの調査区を設定した。

石川：承知した。今後は上空写真も含め、どこまで詳細なレベルまでデータが取れるかは実施してみないと分からないが、試みとしては非常に面白いためぜひ進めてほしい。

敷田：石川委員、加倉井氏、説明に感謝する。コドラートと上空写真でモニタリングしているという回答であった。

(3) カムイワッカ地区における取組み

資料3-3 カムイワッカ地区における取組の進捗状況について

…斜里町・岩渕が説明

敷田：説明に感謝する。カムイワッカ地区についての質問等があればご意見願います。私から質問させていただくが、他の料金値上げは10%のみだが、マイカー規制期間において子ども料金のみ150%の値上げを行っているのには理由があるか。

岩渕：昨年度は、マイカー規制期間の子ども料金がマイカー利用期同様の500円のまま運用を行ったが、バスの金額が加算されていないのではないかという意見があったため、全体のバランスを考慮し、250円の値上げをした。当初は1,050円への値上げを検討したが、値上げ幅が大きすぎると考え、間をとった750円に設定した。

敷田：説明に感謝する。山中氏より質問があるため願います。

山中：マイカー規制期間中に、バス+アクティビティとアクティビティのみと記載されているが、マイカー規制期間中はバスに乗車しなければいけないのに、なぜアクティビテ

ィのみの記載があるのか。

岩淵：アクティビティのみの場合は、徒歩や自転車等で移動される場合を想定した。

山中：了解した。

船木：今年度のマイカー規制の区間は、知床五湖 - カムイワッカ区間でよろしいか。

吉田：斜里町役場の吉田が回答させていただく。マイカー規制区間は知床五湖ゲートからカムイワッカ区間となる。

船木：以前、幌別からカムイワッカまでのマイカー規制の試行事業が3年ほど実施されていた。今後、知床五湖 - カムイワッカ区間のみではなく、さらに広い区間のマイカー規制の予定等があれば教えていただきたい。

敷田：現在検討されている内容でよいので、情報提供していただければと思う。

吉田：以前はカーフリープロジェクトとして秋に3日間実施していたが、今後の継続を考えると資金面等の課題があった。今後は公園や園地のあり方とあわせて検討できれば良いが、現状はカーフリープロジェクトをいつから実施するかは決まっていないため、今後も関係機関含め検討していきたい。

敷田：回答に感謝する。私から質問させていただくが、カムイワッカのアクティビティの1日当たりの上限人数を当初の150名から210名に変更しているが、現状や今後の上限人数変更の予定について教えていただきたい。

岩淵：今年度は上限210名を変更せずに実施する予定である。昨年度実施した結果、上限210名に達しそうになったのが8月のお盆シーズンの1日のみであったことから、上限210名は非常に妥当な数字であると認識している。今年度も実施結果によって上限人数の設定等を再度検討しようと思っている。

敷田：感謝する。確認だが、混雑感を生じさせない範囲で上限210名に設定したということではよろしいか。

岩淵：その通りである。

敷田：以前の検討会議では1時間あたり30名で、1日あたり210名の上限人数で承認している。また料金値上げした際の事業費は1,500万ほどあったと思うが、値上げによってどういう風にバランスが取れると考えているか。

岩淵：昨年度は観光庁の支援があったため、資金的には非常に余裕があったが、今年度については昨年度の1/3程度の全体予算になっている。そういった中で、昨年度同様に運用した場合は、一定程度のサイクルコストがかかってしまうため、値上げをすることによって利用料金が1.3倍になる計算になる。現在の試算では今年度も安定的に運用ができると考えている。

敷田：承知した。運用の見通しが立ってきたため、現状分かる範囲で来年度からの本格実施の見込みを教えていただきたい。

岩淵：来年度の本格実施を行うにあたり、今年度は様々な調査項目を設けて、実施していく。またケガやヒグマ等のリスクをいかに低減させるかが課題である。その中で、カムイワッカ湯の滝の開閉基準について定めてはいるものの、現状は明確な数字での基準を設けていない状態であるため、明確化したい。例えば、カムイワッカの現地に気象観測装置を設置し、一定の雨量を上回れば危険であると基準を設けるなど、来年度以降の本格実施に向けた準備を整えられればと考えている。

敷田：カムイワッカの本格実施は来年度からで変更はないか。

岩淵：現在のところは、その予定である。

敷田：来年度からの本格実施であれば、次回の検討会議で経営の見込みも含め話していただきたい。安定した運用をしていただければと思う。経営が厳しければ、カムイワッカにおける環境へのインパクトが生じやすいため、経営に関する資料の開示に協力いただけるか。

岩淵：承知した。

敷田：またカムイワッカは斜里町と林野庁の貸借契約であるか。

岩淵：その通りである。

敷田：貸借契約は事業継続のために重要な要素であると思うが、契約は問題なく行えている

か。

岩渕：カムイワッカの試行事業については1年毎に契約を行っている。本格実施にあたっては林野庁の理解を得た上でカムイワッカを貸借契約していただければと思う。

敷田：斜里町としては長期にわたって事業を実施する予定であるか。

岩渕：斜里町としてもカムイワッカ地区利用適正化対策協議会としても、そのように考えている。

敷田：林野庁に問う。斜里町は長期的かつ安定的に事業を運用したいとのことだが、カムイワッカの貸借契約が1年のみだが、事業として見込みをもって進めるには1年という期間は非常に不安定であるため、少なくとも3年や5年の中長期にわたる貸借契約を考えていただけないか。1年契約であれば短期的な発想になる恐れもあるため、中長期契約または1年毎の自動更新等様の手段がある。安定的な事業の運用は環境へのインパクトを抑えることになる。試行期間の実績は十分あり、他の方も異論はないと思う。

清水：林野庁としては1年の契約になると思われるが、一度確認したい。

敷田：それでは次回の検討会議で林野庁から報告をお願いします。検討会議までに答えができれば斜里町に直接報告していただいても構わない。斜里町は以上でよろしいか。

岩渕：問題ない。

敷田：それでは「3. 個別部会等からの報告」について意見等ないか。知床五湖のスイレンは時間のかかる問題であるが、関係者の皆様で協力して取り組むと検討会議で合意ができた内容であるため引き続きお願いします。またカムイワッカ地区は今年度が4年間の最終年で来年度から本格実施ということである。斜里町から事業計画も立てられているという内容であり、新しい魅力創出に貢献した事業のため、今後も進めてほしい。以上で「3. 個別部会等からの報告」を終了する。

4. 関係機関からの報告

(1) ホロベツ園地の再整備事業について

資料4-1 ホロベツ園地 再整備事業について

…斜里町・結城が説明

敷田：説明に感謝する。前回、前々回の検討会議でも議題があったホロボツ園地の再整備計画で斜里町が二十年来の課題として取り組んだ計画であり、ここ3、4年は集中的に計画を進めていた。しかし関係者からの合意が不十分であったことから改めて計画を説明いただいた。何か質問はあるか。

桜井：今回のホロボツ園地の再整備事業に関しては、資料4-1の「1. 前回適正利用・エコツーリズム検討会議（2/7）以降の進捗について」にある通り、内容の説明が不十分であり、地域の意見を広く反映していないという意見であった。そのためウトロ地域協議会がホロボツ園地再整備について関心のある地域の方々を募り、斜里町の計画について話しを伺い意見交換を行う会合を設定した。その経緯としては、ホロボツ園地の再整備に関して、協議会の体制をもっていなかったことから、地域にそのような場を設定できないかということで開催することとした。会合では様々な意見があったが、資料では内容が不十分または時期尚早と記載されている。今回の計画が順調に進まなかったのは、一部では地域が反対したという形になっているが、会合で出た意見としては、どのような根拠でこの計画が作成されたのかが焦点の一つである。資料4-2裏面の通り、昨年の議論でどの部分に異論があったのかが重要である。ウトロ地域協議会としては、早期にそして明瞭に計画について協議できる場が必要であると考えている。そのような場を早急に設置していただくことを斜里町に求めていたがそのような場が斜里町は必要ないと考えていらっしゃるのかの確認をしたい。

敷田：前回の議論でもあったように、検討会議の場で、検討部会を持つということがオープンな場になるという合意ができており、その手順を踏むことになるが、斜里町はいかがか。

結城：桜井氏の意見は、もう少しスピード感を持って進めるべきであるという意見と捉えたがよろしいか。

桜井：スピード感と検討会議に関わる行政機関と共に協議を進める必要があると思う。検討会議の中である程度進めたとしても、根拠性や必要性が各管理者の中で上手く共有されなければ順調に進まないと思うがいかがか。

敷田：計画の進め方の問題であると思うが、前回の議論もあるため、今回の部会設置および検討においてはオープンかつ共有しコミュニケーションが行える場として運用をしていただくことでよろしいか。まだ実施されていないことのため言及は難しいと思われる。

桜井：最初の提案の際に、展望台を設置するという具体的な造作の図面まで出されていた。その中には、ホロボツ園地全体の計画を理解した上でなければ、設置の規模間について検討することも難しく、ネガティブな声も多くあった。そもそも遺産地域内に大きな展望台は必要なのかという声もあったため、もう少し地域や管理者と一緒に進めなければならないと思う。

敷田：意見に感謝する。斜里町は検討部会もしくは議論の場を設けると記載があるが、前回発生した問題を繰り返さないように運営していただければと思うが、桜井氏はよろしいか。

桜井：承知した。

敷田：二十年来進めてきた計画で、今後も進めると前回検討会議で回答していただいているため、方向性は変わらないと思うが、進め方を修正していただければと思う。

結城：桜井氏から頂戴した意見は、斜里町としての考えと同様である。斜里町のみでは進められない事業であり、関係機関とも協議を進めていかなければならないと考えている。

敷田：規模の問題については、人によって規模の基準が異なることもある。何を根拠に規模の問題について話しているかは関係者で議論し進めていただければと思う。他にコメントがないため次の議題へ移る。

(2) 知床アクティビティリスク管理体制検討協議会の検討状況

資料４－２ 知床アクティビティリスク管理体制検討協議会の検討状況

資料４－２別紙 知床アクティビティリスク管理体制検討 最終報告書

…斜里町・南出が説明

敷田：説明に感謝する。今の報告について質問等があればお願いします。

間野：装備の導入等に必要な財政的支援があれば、危機管理の対策の準備が進むが、目に見える形で支援のないような項目については、どのように普及していくのか。リスク管理は、問題が発生する以前に準備を行わなければならないことに実効性を持たせる必要がある。そのために、今から考えておかなければならないことを併せて提案していく必要がある。そうでなければ実効性を持たすことができず、自己責任を定義するというやり方で終わってしまい、何年か前に発生した観光船事故のような結果になるの

ではないかと思ったため伺った。

南出：意見感謝する。今後事業者に聞き取りを行い、リスクの確認作業をしながら進めていくことになっている。ここでは地域としてリスク管理を行っていることを情報発信していく、というところが大切である。リスクとは自己責任のみでなく、場所ごとのリスクや旅行者の自己責任等それぞれのリスクがあるが、リスクを分散させる中できちんと情報発信をし、安全対策を行っていることを打ち出していくことが、制度を作る効果であると思う。

間野：つまり利用者は事前にリスクを理解した上で現地を利用し、リスクを回避すべき責任や行為についても自覚した上で利用することで、リスクを回避することができるという認識でよろしいか。

南出：旅行者にもリスクがあるということを知っていただいた上で、多様なアクティビティを利用してもらうことになると思う。また支援内容についても今後事務局を立ち上げ、事業者と意見交換を行っていく中で、こういった形の支援が求められるかについて協議し検討していく。

敷田：新しい計画というのは新しい用語などが定着するのに時間がかかると思うため、斜里町独自で行うのは効果的ではない。前回の会議でも議題となった内容だが、国立公園全体での関係行政との連携についてどのように考えているか。

南出：資料4-2別紙の報告書については、海域部分を早急に先行して実施したいという斜里町としての考えもあり、まずは事務局を立ち上げスタートする想定である。しかし将来的には、様々な法的な枠組みがあることから、環境省や林野庁、北海道の協力を得ながら、知床半島全体のリスク管理ができる仕組みが望ましいと考えている。

敷田：斜里町としては、知床半島全体のリスク管理に広げていきたいと考えているようだが、環境省や林野庁、羅臼町は斜里町からの提案についてどのように考えているか。前回の検討会議では岡野所長から遺産管理計画やエコツーリズム戦略に反映していきたいとの発言があったがいかがか。

間野：将来的にはそのような形でと考えているが、私もまだ十分理解できていない部分もある。旅行者に対するリスク提示というのは、事業やアクティビティ毎に異なり、それを理解した上で参加するということになると思うが、事業は民間事業者が実施するもので制度的にどういう形で入れ込めるかは、今後の課題である。だが例えば、知床五

湖でこういったリスクがあるか等については管理者として環境省も事業者と一緒に検討しなければならない。

敷田：説明に感謝する。リスク管理について共有するためには、考え方から共有していかなければ計画に反映するのは簡単ではないと感じた。斜里町のリスク管理を全体に反映させるために、斜里町独自に進めながら全体の反映についても並行して考えてほしい。

南出：斜里町としてもどのような仕組みで動かしていくかは、これから進めながら考えていくため、この場では明白にどうするかは伝えられない。まずは3月に出された報告書を共有し、それぞれの事業者からリスクの洗い出しを行うため、その後に環境省等とできることを協議し進めていきたい。

敷田：感謝する。一つのリスク管理というプロジェクトであるため、このプロジェクトが何を目的として何が実現できるかを次回の検討会議の場で分かりやすく説明いただきたい。

石黒：本日は検討会議の委員として参加しているが、斜里町の知床アクティビティリスク管理体制検討協議会では、座長として取りまとめたため、補足で説明する。様々な空間で多様なアクティビティが今後も展開されていくため、特定のタイミングですべてのリスクを網羅し、対策を取っていくことは困難である。今回は観光船事故から2年という一つの節目で、検討協議会としての結論を出したという報告である。全体的なフロー図だけでは、この取り組みが全て稼動した場合にどのような姿になるのかを明示的に示せてはいないが、ポイントとしては、リスクの情報や状況を共有すること、それらを消費者あるいは事業者に対して明確に伝えていくこと、そしてこうした取り組みを主導する主体を作る点があげられる。もちろん、複数の主体がある国立公園あるいは世界自然遺産の枠組みの中で、斜里町の枠組みを全体にそのまま反映していくことは困難である。ただし、リスク情報の共有あるいは発信をしていく手法、最終的な目的については、斜里町の取り組みを国立公園ないし世界自然遺産の枠組みで共有できる部分もあるだろう。次回の検討会議では事前に斜里町と私で意見交換を行った上で、進捗を報告できればと考えている。

敷田：補足説明をしていただき感謝する。斜里町として先進的に進めていることのため、環境省、林野庁も歩調を合わせてもらいより良いものになっていただければ良いと思う。

(3) 第8期羅臼町総合計画における観光推進に係る施策について

資料 4-3 第 8 期羅臼町総合計画における観光推進に係る施策について

…羅臼町・川口が説明

敷田：第 8 期の羅臼町総合計画の観光分野の施策内容について説明をいただいた。こちらは説明のみとしたい。

(4) 国立公園指定 60 周年・世界遺産登録 20 周年記念事業について

資料 4-4 (1) 国立公園 60 周年・世界遺産 20 周年記念事業概要

…環境省・西村が説明

資料 4-4 (2) 国立公園 60 周年・世界遺産 20 周年記念事業計画

…斜里町観光協会・新村が説明

敷田：資料 4-4 (2) 「極上の星空・漆黒の暗闇を体感するナイトツアー」事業は、周年事業の一環としてこの新しいツアーを始めたいということである。新しい事業であるため本来はエコツーリズム戦略の提案制度で提案をしていただくものであるが、今回は高架木道のみを使うツアーであり、従来から周辺では動物を対象としたナイトウォッチングツアーが行われていることなどから、今回の会議で提案をしていただき、承認されれば実行に移していただくという進め方で反対はないか。なければ質疑に入りたい。

新村：資料の 3 ページ目にある、観光協会の実施予定日については、今後日数が減る可能性があることを補足する。

山中：確認であるが、利用時間が午後 7 時から午後 11 時ということだが、それ以外の時間はこれまで通り駐車場と知床五湖までの町道も含めて閉鎖されるという認識で間違いないか。過去にこの駐車場及び町道を閉鎖するにあたり、クマの出没も多く餌付く可能性があるのに、駐車場で車中泊をしてゴミを捨てるなどの問題があり、相当苦勞をして夜間は閉鎖するという仕組みを作った経緯がある。今回も利用時間以外は確実に閉鎖されるのかを教えて欲しい。

新村：ゲートの管理は、知床斜里町観光協会と知床ガイド協議会で行い、ゲートのカギを開けて入りすぐに鍵を閉める。また、帰るときも確実に施錠をして終了となるため、利用時間以外で鍵が開いてるということはない。

間野：これまで人が入らなかった時間帯にわずかな人数ではあるが、一定時間人の立ち入り

があることになる。ライト等で周辺を照らすことで、夜間に活動あるいは休息している野生動物に対する攪乱を極力控えるという観点から、面白半分にはサーチライトで照らすなどといったことはしないというルールが必要である。つまり、本当に漆黒の闇と星空を最小限のインパクトで楽しむということを強調することが、いろいろな意味で重要と考える。

敷田：ツアーのブランド名にあるように漆黒の暗闇体験をしていただくので、余分なライトは極力使わないようにしてほしいという意見である。斜里町観光協会はよろしいか。

新村：はい。余分のライト等を使うことはなく、赤いライトを用意して実施する予定である。色々なところを照らすなどの行為はもちろんしないよう、しっかりと実施していきたい。

敷田：議論に感謝する。それではこれで説明を終え、最終的にこのツアーを実施してよいかどうかの承認をとりたい。大きな強い反対がなければ、このまま承認をしてスタートしていただくということでよろしいか。

一同：よい。

敷田：反対はないということで、承認とする。ちなみに先程の議題にあったアクティビティリスクの制度にこのツアーを当てはめるとどのようになるか。このツアーは新しい試みであるので、今すぐに回答するという事で申し訳ないが。

南出：安全対策については、昼間のツアーの安全管理も含めて対応しているガイド事業者が実施するという事であるため、個人の利用ではなく観光協会も含めガイド事業者の引率で安全対策を図った上で実施をすると聞いている。

敷田：私の質問は、先ほど4（1）で説明をしていただいた枠組みをここに適用すると、どのようになるのかということである。つまりここでのリスクの把握というのはどういうことなのか、それを発信共有するというのはどういうことなのかをこの事例で説明すると、分かりやすいだろうという質問である。例えばリスクの掌握というのはこのツアーの中だとどのようになるか。

石黒：全てのフローが想定通り稼動したらという仮定でお話します。まず、このナイトツアーのリスクというものを事前に事業者の皆さんから事務局に対して情報提供してもらい、それを事務局のウェブサイト等で実際にツアーに参加する方にもお知らせする、

あるいは事業者を通じてお知らせすることが一つである。また、そもそも個人で立ち入るよりガイドの引率で行う方が、リスクがコントロールされるということが根本の考え方であるので、このツアーはリスクの低減策として一定の意味を持つという位置づけになるということが二つ目である。それから今回新規事業ということで実施し、今後継続していく中で起き得たリスクの可能性を事務局に共有し、それを今後に活かしていくという流れになる。その中で何か特別な支援が必要であれば、可能な範囲で事務局、あるいは行政を通じて支援をしていくということである。

敷田：このツアーは斜里町でおすすめのプランでもあるため、先行事例となるためにも、例えば観光協会としてウェブ上でリスクの共有等ができるように考えてはいかかが。斜里町それでよろしいか。

南出：斜里町としては大丈夫である。

敷田：それでは、情報提供や指導をお願いしたい。知床斜里町観光協会はそれでよろしいか。先行例であるため、パーフェクトなものではなくてもできるだけ皆さんにわかりやすい事例になるようにしてもらい、次の検討会議で紹介していただきたい。

新村：はい。先程野生動物についての議論もあったが、現在想定されるリスクについてまずはきちんと管理をした上で、ツアーを実施していく中で判明する新たなリスクについてもきちんと協議をし、ウェブ等で公開をしていきたい。

敷田：石黒委員は支援いただけるか。

石黒：もちろん同意する。また当初の町の考え方では、リスクの情報については別のプラットフォームないし既存のものを改修して掲載するという案である。今回は恐らく間に合わないため、現在実施可能な方法でまずやってみるということになる。

船木：基本的な質問で恐縮だが、夜間の知床五湖の利用ということで、駐車場の入口からヒグマが入ってくる可能性はどのくらいあるのか。

新村：現状夜間は閉鎖されているため夜間の状況は不明であるが、知床五湖の駐車場での日中のヒグマの出没という事例は何件か聞いたことはある。ただし詳しい件数までは把握していない。

船木：万が一のことを考えて、夜間のヒグマ侵入時の対応も検討しておく必要がある。

新村：先程ライトについてのコメントをいただいたが、バスから降りて高架木道へ入るまでの間について、入るときと車に乗るときだけは、ヒグマなどの動物がいないかどうかライトで照らせていただき、安全管理をしたいと考えている。

敷田：間野委員何かコメントはあるか。

間野：知床五湖地区において公的に認められた形で夜間に人間が活動する事例はこれまで無かったように思う。このような人間のイレギュラーな行動に対して現地の野生動物がどのように反応するかは実施してみなければ分からないため、特に下車時においては周囲の気配に十分注意するというのを徹底していただきたい。ツアー参加者に対しても緊張感を持たせるような働きかけが必要であると考えている。

敷田：ご意見に感謝する。周年事業ナイトツアーは実施していただきたく思う。以上をもって議事4を終えたため、休憩とする。再開後、知床エコツーリズム戦略の見直し及び知床岬地区における携帯電話基地局整備の議事を進めることとする。

<休憩>

敷田：それでは会議を再開する。議事5．知床エコツーリズム戦略の見直しについて議論を進める。

5. 知床エコツーリズム戦略の見直しについて

(1) 知床エコツーリズム戦略の見直しの方向性

(インタープリテーション全体計画の視点とゾーニング)

・資料5-1 エコツーリズム戦略見直しの方向性

…環境省・岡野が説明

敷田：岡野所長からの説明について、質問や意見などはあるか。

敷田：インタープリテーションという言葉が出てくるが、これは日本語に訳すと翻訳や通訳などの意味となる。ここでは、資料5-1の3ページに書いてあるように、来訪者と地域間のコミュニケーションと考えてもらえばよい。コミュニケーションというと非常に大ざっぱに聞こえるかもしれないが、知床が持っている重要さを来訪者と共有するための一つの試みである。知床の価値については、今まで主に自然科学面について専門家が評価をしてきた。今後は自然科学的な面だけでなく、情緒的な面や文化的な

面をあわせて言葉にしていこうということである。今までの専門家のみによる価値の説明から、この会議の出席者のような知床の関係者の説明にもウエイトが置かれるように変わっていくと考えてよいか。

岡野：そのような形にしていきたいと考えている。

結城：一点確認であるが、資料5-2の2ページ目に「ワークショップを各地で開催」とあるが、このワークショップの規模感や対象者の範囲や詳細等の想定があれば、教えてほしい。

二神：ワークショップについては、知床の価値や魅力を様々な方から収集できればと考えている。対象者は国立公園の保全や利用に携わる関係者や国立公園内を生活の場としている方が対象である。ただし国立公園を生活の場所を場としているとはいえ、ここでは当然ウトロ周辺や、羅臼の町中も想定範囲としている。ワークショップの参加人数については、5人程度～20人程度を想定し、その場その場で必要な方から意見を聞けるよう臨機応変に対応していきたい。

敷田：結城課長としては、町としても関与していきたいという観点からの質問か。

結城：その点を含めての確認だったが、環境省主導ということによろしいか。

敷田：環境省が全て担っていただけるのかという質問だがいかがか。

二神：今回のインタープリテーション全体計画と知床エコツアーリズム戦略の見直しについては基本的に環境省が主導でやるということで考えている。

岡野：主導というか、環境省で音頭をとらせていただき様々な場を設定し、皆様からのご意見をいただくという形を考えている。

敷田：環境省の方で責任を持つが仕事は分担させてください、というメッセージだと思うので、可能な範囲でお手伝いいただきたい。特に地元の関係者が加わるため、斜里町と羅臼町の参画は必須であると考えます。

石黒：観光地経営という分野から三点発言させていただく。一つは資料5-1でゾーニングとともに使われているイメージという言葉についてである。現在、観光地としてのこのような戦略においては、イメージ戦略が非常に重要になってきている。私が斜里町

の観光協会とともに行った調査では、知床は知床半島を空中から見た写真のイメージが強すぎて、そのイメージと実際の体験との齟齬が問題として指摘された。もちろん、生態系や海と山のつながりを表す図としては、この資料5-1の4ページにある画は非常に素晴らしいものであるが、一方で旅行者の体験がこれに紐づくかという点、なかなかそうはいかない。これは一見初歩的な議論のようで本質的な議論であり、今回の検討でイメージ戦略として実際に観光客が見られる知床のイメージを定められると、別途検討されるストーリーと、実際の旅行者体験が紐づくのではないかという点である。

二つ目はこれも斜里町観光協会との調査でわかったことだが訪問者目線ではどこからが知床なのかというのがわかりづらいという点である。「島嶼部に似た半島部」という発言がどこかにあったが、島嶼部とは異なり、半島は物理的な境界が視認しにくい。どこからが国立公園なのかを訪問者目線でデザインし、国立公園の内外の差をデザインするという考え方を入れられると、このゾーニングがさらに意味を持つのではないか。

また三つ目は、インタープリテーション全体計画にある「観光プロモーション」という言葉についてである。この「プロモーション」は既視感が強く、時代錯誤な感も否めない。例えば、広報とかパブリックリレーションズ、またはインナーブランディングという言葉を含めてブランディングとするなど、社会全体との双方向のコミュニケーションを行うというメッセージを持たせた方が良いと考える。観光プロモーションと言ってしまうと、既存の広告宣伝事業に見えてしまうので、そうではないというメッセージがあるとよい。

敷田：石黒委員からは、観光客が実際に目にする知床を切り取ったイメージ戦略、どこからが知床なのかということの分かりやすくなる空間的なデザイン、プロモーションという言葉は既に古いものとなりつつあり、別の言葉に統一が必要であるという3点のご提案をいただいた。

山中：知床エコツーリズム戦略の見直しについてだが、総論としては素晴らしいものであり、ぜひ実現していただきたい。ここ10年ほどの間、知床の保護と利用に関する将来的なビジョンが不明確で混乱したこともあったが、そのビジョンを明確にするという方針が立てられた。さらに地域で苦勞してまとめたゾーニングとイメージ案を前面に打ち出していただき心から感謝している。今後はそれらをどう実現していくか、仕組みや運用方法をどう担保していくかということに課題があると考えている。特に先端部地区については様々なリスクがあり、マナーや心得のレベルではそれらのリスクは管理することができない。以前、法的担保を持つ仕組み作りを目指し、環境省と地元関係者間で議論がなされていたが、最終的には林野庁と環境省の縦割り行政の影響により双

方の調整がつかず、結論が出なかったという経緯があった。将来的なビジョンを明確にするという素晴らしい目標を持った今、縦割り行政を排し法的担保を持つ仕組み作りも含め前向きにご検討いただきたく思う。

敷田：山中氏からは、将来的なビジョンを立てて計画だけに終わることなく、実現するところまで注力してほしいという趣旨のご発言をいただいた。このことについて環境省いかがか。

岡野：実現を目指している。この提案制度はビジョンを実現するにあたって重要な位置づけであると考えており、今後ともぜひご協力いただきたい。

敷田：この件については環境省からの提案事項であるため、会議に参集している皆さんは本提案について意見を言える立場にある。ぜひ自分事として考えてほしい。具体的な提案プロセスは踏まないが、実質的には環境省からのインタープリテーションの仕組みづくりの提案ということであるとお考えいただければと思う。環境省としてはそのような認識でよいか。

岡野：よい。

船木：資料5-1の7ページ目、策定に当たってのお願いというところについて伺いたい。今後、地域の方から様々なアイデアを頂戴するなかで、いただいた意見が実現可能かどうかという問題が存在しているように思う。インタープリテーション全体計画ができることによって、提案したアイデアの実現に向けて地域の方々はどのようなサポートを受けられるのか、ということが具体的に分かれば教えてほしい。

岡野：エコツーリズム戦略策定の段階においては、資源や価値の整理及びそのストーリーの整理が主な論点になると考えており、体験についてはまさにこの部会で実現を目指す形になると考えている。そこで同時に事業性や環境への影響についても評価していく形になる。

敷田：資料5-2の記載内容としては、部会が発注して具体的なプロセスを作る、という理解でよいか。

岡野：事業の立ち上げはあくまでもこの提案制度を用いる形となる。これからの議論次第ではあるが、エコツーリズム戦略の中には具体的な体験の項目までは書き込まない方向で考えている。先ほど山中氏の発言にあったように、制度や仕組みを検討していく際

には、この検討会議の場で全ての整理がつくものではないため、部会で整理をする形になっていくであろう。

船木：エコツーリズム戦略では「人と自然との関わり」の価値について触れられており、多くの方々に共有されている。原生的な自然の価値に基づくツアー等であれば、多くの参加者が見込めるため、経営的にも成り立つものと推察するが、一方で「人と自然との関わり」のように、重要なことではあるが集客が難しいような価値もある。そのような価値に基づく事業を続けていくためのサポート体制があれば良いのではないかと考える。

岡野：個人的な意見で恐縮だが、アドベンチャートラベル等の高付加価値ツアーは1ヶ所に1週間程度滞在するものが多い。ツアー全体のストーリーの中で、今までは伝えきれていなかったものもツアーに含めることによって、全体として採算を合わせるようなことは可能ではないかと想像している。観光庁等の事業支援も活用しながら、メインとなる自然体験とそれによって得られる自然の恵みを地域はどのように享受し利用しているということが伝わるような構成のツアーにできればよいのではないかと考える。

松田：この見直しの方向性について私も賛成である。しかし、実現するまでのゴールをしっかりと定めて実際に進めていかなければ策定しても意味がない。ネイチャーガイドとしての個人的な意見となるが、こういったものはプロダクトアウトになる傾向がある。しかしプロダクトアウトは消費者に伝わりにくく、マーケットインの考え方の中にプロダクトアウトしたものをどのように組み込んでいくかという仕掛けがなければ消費者には受け入れてもらえない。そこまで作り込まなければ活用されないのではないかと懸念している。さらにこれは各行政機関が垣根を越えて実行し、かつそれぞれが本腰を入れて取り組まなければ実現可能性は低いように思う。知床は斜里町及び羅臼町の2町によって成り立っており、それぞれが何を求めているかについて違いもあると思うが、ぜひ協力体制の構築を進めていただきたい。それを踏まえると2年間というスケジュールは非常にタイトに感じるため、より長期的なロードマップを示していただきたい。加えてもう1点、斜里町と同じような形で羅臼町側のリスクマネジメントもしっかりと組み立てた上で両町で整合性を図らなければ来訪者にとっては理解しづらいものになってしまう。斜里町側と羅臼町側でリスクの提示の仕方や基準が異なると混乱を招くため、両町で協議し整理を進めてほしい。

敷田：プロダクトアウトというのは、作り手側が作ったものを消費者に売りつけるという考え方であり、マーケットインというのは、消費者側が求めているものを把握したうえ

で、それに合ったものを作って提供するという考え方である。

船木：消費者の需要について考えると、原始的な自然を感じることができるようなツアーは商業的にも成功しやすいと推察する。一方で、注目度が低く商業的にも成功しにくいのが、知床の価値として大切なものが他にも存在していると考え。インタープリテーション全体計画において、それらを何らかの形でサポートする体制があればよいと個人的に感じた次第である。

敷田：船木委員からは、マーケットに合わせることを意識すると提供しやすいものへと流れるリスクがあるのではないかと。本当に大事なものを意識すべきであるという意見を頂戴した。

松田：言葉足らずであったため補足したい。なんでもマーケットインに流される必要はないと思うが、段階を踏まなければ消費者には受け入れてもらえないと考える。特に世界自然遺産が目指している普遍的な価値については社会にどう評価されるかで決まるものであると思うため、それに伴った仕組みを作っていくべきである。

敷田：OUVは多くの方によって価値があると認められたものであるが、一方でそれは個別の価値であるということの説明が必要であるというご意見を頂戴した。そこは矛盾する意味を含むため大変なものと推察するが、インタープリテーション全体計画の中で進めていただくことになると思う。他にご意見お持ちの方はいるか。

間野：資料5-1の7ページ、策定にあたってのお願いというところについて、知床で生活や仕事をされている皆様の視点からと書かれている。これは、策定に向けては環境省が音頭を取るが、そのコンテンツは国が押し付けるものではなく地域が実現したいことを盛り込む前向きなものと理解した。しかし、議事4で羅臼町が示した今後の観光推進に係る施策を拝見したが、羅臼ならではの独自性を感じることができなかった。今回のような戦略立案においては本当に羅臼町が実現したいことあるいはアイデンティティとなるものを発信することが重要と強く感じている。斜里町からは先ほどホロベツ園地再整備計画について説明があったが、これは単なる展望台の整備の話以上の課題があると感じている。地域の持続性も担保しながらホロベツ園地も含めてどう売り出していくかという視点が必要ではないだろうか。また、観光客は時間とリソースが限られている中で知床を巡るわけだが、どのような動線を辿れば羅臼町、斜里町、そして観光客の3者が満足できるような見せ方ができるかという視点に立ったコンテンツの検討が必要と考える。このためには両町の協力体制が不可欠であり、縦割り行政がその障壁になるのであれば排除すべきだ。そして最も重要なこととして、計画

の枠組みは国が作った上でコンテンツを検討する際は地元が知恵を出し、魅力的な提案があればそれを実現させるために国は責任を持って進めるという体制の構築が必要と考える。

敷田：ご意見に感謝する。全体を通して岡野所長から何か一言あるか。

岡野：様々なご意見をいただき感謝申し上げます。環境省としても手探りの状態であるため、皆様さんとも相談させていただきながら進めたい。また、どう実現させるかという点を見据えながら進めるべきというメッセージを皆様から強くいただいた。2年計画では時間が足りないかもしれないが、その点も踏まえて取り組みを進めて行きたい。

敷田：予算を獲得してもらえるのであれば、計画の期間は長ければ長いほどよいので尽力いただきたい。インタープリテーション全体計画については、これまでOUVに象徴されるような世界自然遺産の評価システムで価値の説明がなされてきたものを、我々自身で価値を説明していく時代に入ったということである。非常に重要な一歩であるため、斜里町、羅臼町、林野庁をはじめぜひ皆さんに関心を持って積極的に関わってもらいたい。インタープリテーション全体計画及びエコツーリズム戦略の見直しについて他に意見がなければ、知床岬地区における携帯電話基地局整備の議事へ進みたい。

6. その他

(1) 知床岬地区における携帯電話基地局整備について

資料6 知床岬地区における携帯電話基地局整備について

敷田：では次は知床岬地区における携帯電話基地局整備についてである。資料6だが、見ていただければ分かる内容であるため、特段の説明はせず必要な部分についてのみ補足願う。

携帯電話基地局整備についての簡単な経過は、先般から非常に社会的関心が高まり、様々な意見が出ている。このように一堂に会する場での意見交換ができていないこともあり、それぞれから意見が上がっている。本日はエコツーリズム検討会議という知床の観光やレクリエーション利用に関しての考え方を整理する会議の場に関係者が一堂に会している。是非、積極的に発言をし、確認をしてほしい。

この携帯電話基地局の整備等については、2020年10月15日に開催したエコツーリズム検討会議において、一度基地局の整備は積極的に進めるという合意をしている。この時の議論は、知床五湖の通信環境の改善が主なテーマであった。その後、観光船の事故があり、急速に知床岬と羅臼側を含めた基地局整備の話に拡大をしたものである。ただし、この10月15日の時点では、全体としては通信環境の改善についてこ

の検討会議では積極的に進めようという合意であったが、当然景観や環境への影響が考えられるため、事前にこの検討会議でその点をよく話したいという内容が同時に合意されている。この点に関しては、環境省からはこのような通信施設の設置については事業者の情報開示が十分にできない可能性があるため、可能な範囲で情報提供をしたいという回答がこの検討会議では得られている。

この件に関して先般科学委員会が開かれたが、それから遡る過去二回の科学委員会の情報提供と議論の内容は非常に希薄であった。私は当事者として参加したが、これは参加した委員として反省すべきことである。その中で十分な情報がないままに設置が決定され、許可が進められたという不満も含めた社会的な意見が高まっているというのが現状である。

本日ここでお話いただきたいのは、私たちは一度この場で携帯電話の基地局についての合意をしたが、景観や環境に対する影響は早くに相談をしてほしいという要望も同時に出している。ここでは今後こうした行き違いやコミュニケーションのミスが起こらないようにするためには、どのように議論を形成していけばよいのかを意識して発言いただきたい。基本的に情報の提供が不十分であったことは、科学委員会でも各委員から発言があった事実であり、この場でも十分な情報の提供があったとは思えない。今日いただいた情報については既に出すことができた情報もあったはずであり、そのような情報提供をこの場でしていただきたいというのは皆さんの要望だと考える。補足があれば事務局から願います。

岡野：先ほど御紹介いただいた部会の議論は、知床五湖に関する内容であったと認識している。その時にも申請者の関係で出せる情報は限られているという話をさせていただいており、科学委員会においてもその当時出せる情報を出させていただいた。しかしそれが不十分であったという内容の指摘だったと理解いただきたい。

敷田：恐らく環境省としては十分、受け手にとっては不十分だったという認識の齟齬があったと思われる。この10月15日の検討会議で議論されたことは、主に羅臼側からの発言をベースにしており、当時参加していた長谷川氏から羅臼側での検討の経緯の話もあり、知床五湖の話題が中心であったが、知床半島全域の話題であったと私は理解している。山中氏、発言をお願いします。

山中：今日の議題にあった知床エコツーリズム戦略の見なおしの中でも知床の原生自然、あるいはその知床らしさ、それをどう伝え、どう生かしていくか議論があった。羅臼町の総合計画の中でもアドベンチャートラベルで、知床の自然をいかに高付加価値の観光に持っていくか等、様々な議論があったが、その全てに反しているのが知床岬の携帯基地局整備事業である。

知床岬とは知床の最重要地点であり、我々登山者やシーカヤッカー等、野外でのアクティビティを楽しみにしている人たちにとって、心の故郷のような場所である。そして一般の観光客にとっても直接上陸することはできずとも、知床の先端部にはこのような素晴らしいところがあるのだという思いの中で、知床に来て知床の先端とはどんなところなのだろうという思いを馳せ、観光船に乗って眺める。そういう場所である。また、観光ポスター等、あらゆる場面で必ず知床岬のすばらしい空撮が使われる。このような場所にサッカーコート並みの太陽光パネルを設置するなど、あり得ない話である。

世界遺産としての顕著で、普遍的な価値に対しても非常に大きな問題があるが、それ以前の問題として、今日議論してきた様々なものの先に最終的につながる知床の価値を台無しにしてしまう。観光船事故では、当該会社が携帯電話はつながると嘘をついて運輸局の審査を通過していたため、国交省は携帯電話のみの通信手段は認めないということとなり、別の通信設備を整備することが義務づけられた。以上の理由から、もう観光船は関係ない。しかし、羅臼町長がおっしゃるように、一部の漁業者の方は携帯の電波があると安全性は高まり、便利であると、そのような意見があるのは確かである。ただ、それがどの程度まで必要なのか。その点を知床全体の価値、あるいは知床を利用する人たちも含めてあらゆるバランスの中で考えていかなければならない。

例えば我々山岳会は頻繁に知床岬に行くが、やはり知床岬はあこがれの場所である。通信環境を整備する手法として、現在は最新の技術で多岐に渡る方法あると思われる。太陽光パネルでなければいけないということはないのではないか。これはもう一度原点に立ち戻って考えなければならないことである。

敷田：ご意見に感謝する。関連するご意見、または視点の違うご意見があればお願いします。

遠山：環境省は知床岬への立ち入りについて議論したときに様々なパンフレットを出している。その中で「知床は人類共通の財産として持続的な保全を図り、より良い形を後世に引き継いでいく必要がある。その中で特に質の高い自然を有する知床半島先端部を守るためのルールづくりを慎重に進めている」と言っている。そういう中で今回このような施設を作るということは、環境省は方針転換したのかと思う。ましてや景観の保全に配慮すればよいと言っているが、あのような施設を作る事自体が景観を損ねると考える。自然保護協会は斜里町にも、町議会にもこの件については反対あり、再検討すべきだという内容の要望書を提出した。

今年を知床国立公園、知床世界自然遺産指定の節目である。この記念すべき年にこのような問題を惹起するのは、私としては大変心外である。また、通信手段の確保に関しては事故があった年に環境省からも話があったが、その時に知床岬の話は全く出

なかった。知床五湖やウトロ灯台等の話しか出なかった。もし本当に通信手段の確保が必要であれば、高額な施設の維持保全に予算をかけるよりも、衛星電話などを、必要とする漁業者に貸与してはどうか。そういう検討もしてほしい。以上の理由から、自然保護協会としては、今回の知床岬における携帯基地局の設置には反対であり、再検討すべきであると申し上げる。

敷田：ご意見に感謝する。遠慮なくお話をしていただきたい。この場では、基本的に他者の発言を批判しないように願う。

米澤：私はこの携帯電話基地局設置の協議会の中に入って検討してきた。また、小型観光船の捜索では斜里水難救難所の救助長として、現場に赴き、捜索活動を十二時間やってきた。人命の尊さは、当然何よりも重いと考える。事故の際に携帯電話がつながれば、適切なアドバイスもできたのではないかと思う。

携帯電話基地の工事の準備はもうほとんどできている。これを止めるよりは、ソーラーパネル設置後にもっといい方法が見つければ、それに替えていけばよいのではないかと考える。今現在灯台の電源もソーラーでまかなっている。

灯台の電源がソーラーパネルになる前は発電所があった。私は漁船でそこに燃料を運んだという経験があるが、とても大変な仕事であった。それがソーラー電源でできるのであれば、景観上多少見苦しい部分はあるかもしれないが、やはり人命を第一と考えれば、その方向が最善ではないかと考える。

敷田：ご意見に感謝する。他の方はいかがか。

山中：携帯電波の入り方が以前と比べて格段に良くなっているため、その現状を紹介したい。

敷田：お願いする。

山中：今年は度々仕事等で知床岬に行っているが、驚くべきことにウトロ港を出てから文吉湾の港の入り口まで、ほぼ携帯のアンテナが2本、もしくはまれに1本立っている。つまり不感地域はほぼないというのが斜里側の現状である。

現場の工事の方に聞いたところ、ウトロの基地局の電波を非常に強化してきている。それはNTTが先行してやってきているが、更に強化する予定だと伺った。また、NTT以外の三社についても、NTT同様にウトロ基地局を強化する予定だそうである。現状でさえ、少なくとも斜里側はほぼ電波に問題はない。灯台の正面辺りの狭い海域は難しいかもしれないが、今後さらに強化されれば、恐らくアブラコ湾辺りの岬突端直前までほぼ完璧に通話可能な状態になると思われる。もう斜里側については、それで十

分ではないか。

問題は羅臼町も心配されているような赤岩の方に漁業で行かれる無線もついてない小型船の漁業者の方々であるが、その辺は斜里町長おっしゃるように、ニカリウスに予定されているものを先に作り、どのぐらいまで電波が飛ぶかを試してみても遅くないと考える。また、衛星携帯、あるいは数年以内には高高度を飛行しながらかなり広範囲で非常に高速の電波を拾うことができるようなシステムもできるようであり、スターリンクなど、他の方法も含めて考え直した方がよいと考える。

敷田：ご意見に感謝する。他にコメントはないか。オンラインでコメントが来ているため、代読する。

綾野：環境省の方に質問です。昨年12月26日宇登呂灯台地区に高さ30メートルの鉄塔を建設する計画を見直したはずですが、そのさい、同地区は知床・世界自然遺産地域内にあり、景観に配慮したとコメントしております。この宇登呂灯台地区は特別保護地区ではありません。知床岬地区は特別保護区であるにもかかわらず、ここでの計画が進められました。これはなぜでしょう？

敷田：誰がコメントしたかは明記されていないが、特別保護地区等については、資料を見て判断する必要があるため、即答はできない。どこに地区の境界線が走っているかという問題と思われる。後程直接お答えいただけるか。皆さんにはメーリングリスト等で共有していただければよいと思う。

柳川：チャットの文言を後で判断し、回答できる部分はさせていただきます。

敷田：それが妥当だと思われる。私からの意見だが、せっかく2020年10月15日にこの場で携帯の通信環境改善のことを話し合って合意し、その時に景観や環境に対する懸念があるので、できるだけ早く情報共有をしてほしいとの合意も得ている。このように、一度決まったことを引き続き意識し、積極的に情報を提供していただく必要はあったと考える。強いていえば、現状は「早すぎた決定、遅すぎた議論」のようになっている。戻って議論をするのは大勢の方にとって非常に辛いことであり、誰もが納得するような答えがこの場で出せるとも思えない。よって、今後このような事を繰り返さないように、環境省、林野庁、管理者の北海道庁も含め、この遺産の管理者の方、国立公園の管理、林野の土地の管理については（特定の人名や企業名を出す必要はないが）、このような話があったと検討会議で共有していただければ、もう少し早い段階で前向きに議論ができると考える。もちろん、ここで決められることではない。これは法律に基づいた手続であるという主張はもつともであるが、

少なくともこの検討会議には知床の自然環境の利用と保全に関心を持った方々が集まっている。全く違う所で話が進んでしまうのは、非常に納得しにくいと思われるため、できるだけこの場を信頼して情報を出していただきたい。

その情報の重要性やどう影響を与えていくかはもちろん情報を出す側がある程度判断をする必要があるが、ここはコミュニケーションででき上がっている場であるため、必要な情報は共有していただくことが重要である。

繰り返しになるが、今回の件は本当に早すぎた決定、遅すぎた議論になっており、ここで議論を重ねてもここまで積み上げたものを簡単には否定できないというところまで来ている。いうなれば、私たちが同じ失敗を繰り返さないような議論が必要ではないか。特定の誰かを批判するのではなく、今後はコミュニケーションがとれて早目に議論ができ、自由に意見ができる仕組みと場を作る必要があると考える。特定の関係者だけで集まり議論をするということは、別の場では違う説明になるなど、不信感を生んでしまう。お話をいただける部分はこのようなオープンな場でしていただきたいというのが私からの要望である。

他に意見はないか。様々な意見はあると思うが、携帯の通信というのは、電話やネットを見るだけではなく、言うなれば移動を支援するシステムにもなっている。私たちは地図を利用し行き先の情報を得るなど、移動をやすくするための手段として、既に携帯電話やスマートフォンを使い始めている。そのため移動を支援するシステムとしては、先にできていた灯台はよいが、携帯電話はよくないというのは世間に理屈が通じなくなってきたという現状もある。その辺を冷静に考えて判断、議論をしていく必要があるというのが私個人としての意見である。やはりこのような議論は時間をかけてする必要があるため、次回からはこの場がその役割を果たせることを願う。他に意見はあるか。

岡野：この通信基盤の強化については、知床半島地域通信基盤強化連携推進会議で地域の議論がなされてきたというふうに向っている。恐らくそういったところから提案をいただくことになる。

山中：環境省に質問したい。この件は当初環境省がユネスコへの報告は不要としていたが、6月7日の臨時科学委員会でユネスコに報告が必要なものだろうという判断になったはずである。

我々が非常に心配するのは、今でさえ観光船事故で知床観光がまだまだ回復できていない状況の中で、これが例えば危機遺産の指定を受けることとなったり、万が一ドイツのエルベ渓谷のように世界遺産の取り消しになった場合、地域が被る経済的打撃は甚大なものになると危惧している。隠して後から判明したということになると大変な事になるため、早めに報告していただきたい。その後ユネスコに報告はした

のか。

岡野：報告はしていない。可能性を評価するために、これから追加の調査が必要であるというのが、科学委員会の判断である。その調査結果を踏まえて判断する形になる。

敷田：この件をこれで終了し、全体を通して本日の振り返りと確認に進みたい。

本日は設置要綱への委員の追加で、三人の新委員をお迎えした。最後の議論も大変重いものになったが、今後、石黒委員、船木委員、松田委員にはご活躍いただきたい。ここでの議論は、知床の世界遺産だけではなく、この地域の将来を担う重要な議論である。この積み重ねに尽力願いたい。

エコツーリズム戦略に基づく提案については、北海道庁から報告があったとおりである。

個別部会からは三つの話題が報告されたが、厳冬期の知床五湖エコツアー事業についての事業報告。知床五湖地区における取り組み。これはスイレン除去についての話題も含んだ。また、カムイワッカ地区における取り組みは、今年が四年間の最終年で来年から本格実施ということであり、土地の貸借も含め前向きな検討を林野庁にお願いしたい。

議題 4 の関係機関からの報告では、幌別園地の再整備事業について斜里町から過去の経過も含めて新たな枠組みの提案があった。ウトロ地域協議会からのご意見もあったため、これについては関係者の前向きな議論をお願いしたい。知床アクティビティリスク管理体制協議会の検討については、斜里町から同じく説明をいただいた。今後このリスクマネジメントが知床の魅力を向上させ、安心して知床を訪れてもらうことに繋がると考える。羅臼町からは、総合計画の中での観光推進について、羅臼町としての熱意について語っていただいた。知床国立公園 60 周年・世界遺産 20 周年の記念事業については、漆黒の星空ツアーについて皆さんの承認を得ることができ、実施していただくこととなった。

議題 5 のエコツーリズム戦略の見直しについては、環境省からインタープリテーション全体計画の提案があった。この場で合意され、進めていただく事になる。手順については資料の通り、今年度と来年度である。

携帯電話基地局については、皆さまから改めてご意見をいただいた。

以上が今回のエコツーリズム検討会議の振り返りである。この場での議論は、考えの違う関係者が一堂に会して議論ができる場であると評価していただきたい。誰かの答えに従うのではなく、より良い答えを模索していくというのがこの場での物事の決め方である。今後も是非その基本方針に沿ってこの場にお集まりいただければと思う。この場を有効利用できるか否かはこの場に集まった皆さま次第である。立場や個人の意見を越えてお話をする場になればより良いものになる。以上である。

西村：以上で令和6年度第1回適正利用・エコツアーリズム検討会議を終了する。

(閉会)